

もいちど夢で逢いましょう

ルフ

頼む。終わらないでくれ！ 覚めないでくれ！

これまで感じたことのない多幸感の中。

それが終わってしまう極限の絶望の中。

男は目の前に意中の女がいるにも関わらず、涙を流し半狂乱になり叫び続けた。

終わらないでくれ。終わらせないでくれ。そう言い続ける男に女はただ優しく微笑む。この世に怖いことなんてないんだよ。そう語りかけるかのように。

「……………！」

男はそれを見てピタリと叫ぶことを止めた。

安堵ではなかった。改めて彼女との深い隔たりを感じてしまったが故の諦めだった。

「う、うう……………」

男はその場に崩れ落ちる。そして声を殺して咽び泣いた。

終わらないでくれ…………頼む…………。それはもう言葉になっていなかっただろう。願いは届かず、呻き声と涙だけが無為に流れていく。

それでも、男は祈ることを止められなかった。

事のきっかけは大学入学から5か月。初めは同じような生活をしていた寮生もそれぞれも生活が定まり、朝食の席もめつきり寂しくなった時期のことである。

「好きな人ができた」

久賀野はいつも通りの朝食の席で唐突にそう呟いた。

その日、富盟荘の食卓についていたのは、僕と久賀野と宮間の3人。朝の遅いこの大学の生徒では、珍しく朝食を食べることの多いいつものメンバーだった。宮間はその台詞を聞いて大げさに驚く。

「おいおい！聞いたか？あの“クレオパトラに声をかけられても気付かない”とまで言われた久賀野が今なんて言ったよ？」

熱弁している宮間は実際面白がっているようで、言葉とは裏腹にそこまで驚いてはいないのだろう。驚いてるのは僕のほうだ。

久賀野は草食系と言うよりは、石でも食べているのでは？と思うほどに何事にも冷めていて無感動な男だった。無論、僕も宮間もそんな久賀野にもユーモアがあり、決して無感情な奴ではないことを知っているが、そっち方面に関しては——ちよつと想像していなかった。

「しかし、昨日の夜までは全然そんな素振りなかったよな？ どうしてこうも唐突にそんな話が出て来るんだ？」

宮間はこの場の全員が疑問に思っていることを訊いた。久賀野は僕らの驚きを無視するかのように冷静に答える。

「それは昨晚の時点ではまだ会ってなかったから」

「じゃあ、いつその女には会ったんだ？」

「夜」

「夜？」

「部屋で」

「へ、部屋で？」

「布団に入りながら」

「布団っ!？」

「夢の中で」

「えっ……あ……ゆ、夢え？」

宮間はハアーっと息を吐くと、脱力したまま自分の席へ座った。俺は苦笑いを浮かべながら、戻ってきた宮間に言う。

「取り越し苦労だったな。まあ、僕は最初からおかしいと思ってたけど」

「嘘付け、俺より動揺してたくせに。へっ！しかしつまんねえーの」

その後、詳しく聞いてみた夢の内容はこうだ。

気が付いたら何もない真っ白な場所にいて、久賀野は一目でそれが夢だと気付いたそうだ（明晰夢とい

うやつだろう。そんな中で女の子が一人立っていた。久賀野は他に何も無い世界ですることもなく、その女に話しかけたそうだ。そして、如何に鈍感な久賀野とは言えど、数分彼女と話したところで気付き始める。

美しい容姿、時間さえ忘れる楽しい会話、目が覚めても忘れようのない愛嬌ある仕草。夢はその人の記憶と言うが、久賀野はそれを疑ったそうだ。彼女は現実ではもちろん、想像でさえ補いきれないような魅力だったという。

「俺は今でもこっちが悪い夢なんじゃないかと思ってるよ」

語り終え、恍惚の表情を浮かべた久賀野は確かに現実に戻ってきてはいないようだ。冷やかすつもりだった宮間もそれを躊躇ってしまっているようである。

「……ま、まあ夢の中とは言え、あんまり女にのめり込まないように気を付けろよ」

宮間はそう冗談めかして朝食に戻った。久賀野のような男でもそんな夢を見るものかとは思ったが、僕も宮間と同じくその時は何も気にしなかった。夢で見たことを懐かしむことは誰だってある。しかし、それは本来消えていく記憶の残滓であり、昼食まで覚えているかも定かでない儚いものなのだ。久賀野も話は終わりのようで、朝食へと目を運び、一言ぼそりと呟く。

「でも本当に綺麗な人だったんだあ……」

彼がそう呟いたときには誰もそれを聞いてはいなかった。

富盟荘は俺たちの通う大学の寄宿舍である。歴史あると言うにはあまりにもボロ過ぎる木造建築。鄙びたと言うより黴臭いだけの内装。そんな愛着の沸かないこの宿舍に今でも人がいるのは、単に普通教科の授業棟から近いと言うだけの理由であり、ほとんどの学生は研究室に属するや否や、専門学科の教室に近い別の寄宿舍に移ってしまう。

そして、大学入学してすぐに専門分野を決め、研究室に行くことの多いこの大学では、必然的に富盟荘に在るのは目的の決まらない半端な学生だけになってしまふのだった。故に一部の学生はこの寮のことを『不明寮』と揶揄したりもしている。しかし、そんな皮肉を気にするような者は初めからここに来ない訳で、誰もが暢気過ぎるほど平和な毎日だった。

そんな富盟荘にもここ半年の間に、僕らにとっては大きな――世間にとっては事件ですらない事件が2つ起きた。

一つ目は例の朝食から5日後、あれから久賀野を誰も見ていないと気付いた時であつた。僕や宮間は授業で出席を取る時に初めてそれに気付き、寮内でも全く見なくなったことを思い出した。『久賀野失踪事件』――と言いたところだが、その日のうちに彼は見つかったので、やはり事件と言うには大袈裟なのだろう。探す必要もほとんどなかった。5日間布団に潜っていた彼を見つけるのは、育ち過ぎた筈を見つけるより簡単な作業であつた。

「真面目な久賀野もついに登校拒否か。そういうのはもつと若いうちに経験しておいたほうがいいぞ。単位に情けはないからな」

「いや、別に大学が嫌になつたわけじゃないんだ」
彼は寝過ぎで不健康な体をボリボリと搔いた。

「ただこの前の夢の続きが見れたらなあと思つて」
「……………」

聞けば久賀野は水道の水だけ飲みながら、5日間ひたすら寝ていたらしい。僕と宮間はさすがに呆れて顔を見合わせた。彼の夢中の彼女に対する想いは確かに本物なのだろう。残念なことに。

そんな久賀野を生かすべく、無理やり部屋から出している途中で宮間は僕にだけ聴こえる声で呟く。
「でも俺はちよつと羨ましいけどな」

僕はそうは思わない。

そして、この不吉な発言こそが2つ目の事件の始まりであつた。

「おい久賀野！ 例の夢を見れる良い方法訊いてきたぞ！」

宮間はさも自信あり気になり込んできたが、僕としては初めから期待は出来なかつた。

あれから2か月。近年の長すぎる残暑は、消えるときは一瞬で消え、秋の気配を感じる前に冬へと変わっていた。そんな中、暑さにも寒さにも負けず、久賀野は様々な方法を試した——それはもう本当に色々

と試した。思えば例の5日間失踪事件も「二度寝は夢の続きを見るのに効果的」を実践しただけのことで、無事大学に戻りつつも彼の心は一步も布団から出ていなかったのだろう。夢日記のようなオーソドックスな方法から、枕の下に写真（彼の場合イラスト）、体を縄で縛り付けて金縛り再現など、彼のやり方は見境いなかった。

「どうして会えないんだ……」

久賀野は焦っていた。日に日にその彼女の記憶を失っていくことに。僕らには記号の集合にしか見えない彼女の似顔絵も、いつの間にか部屋を埋め尽くすほどになっており、もはや彼を笑うものは誰一人いなかった。僕や宮間も新たな方法を聞いては彼に教えたが、言うまでもなくそれは報われず、その日の宮間の言っていることも僕にはそれこそ夢物語に聞こえた。

「いいか、枕を集めるんだ。どれだけかって？ そりゃあ多いほうがいいだろう。昔俺が婆ちゃんに聞いた話だけど、枕ってのは本来人の魂を夢へと運ぶ船なんだとよ。探し物がある時には多くの船を出さないといけない。つまり沢山の枕を集めてそこで寝れば探し人も見つかるってわけだ」

僕はあまりの迷信臭さに呆れたが、久賀野と宮間の熱意によりそれは実行に移された。富盟荘内「枕収集祭り」である。僕らは交流のあるなしに関わらず、寮内の学生全員に声をかけた。

「まあ汚さないなら一晩くらいは……」

「へー、馬鹿なこと考えるんだな」

「成功したら今度は俺にもやらせてくれよ」

ほとんどの者は面白がってその日限り枕を貸してくれたが、一部の非協力的な者に対しては夜な夜な盗み

に入った。ある意味、枕返しよりも性質が悪い。

「起こさないように……慎重に……ずおりやあ！」

「……あいてえっ！ なにしてんだっ！」

乱暴に枕を筆られ、それを追いかけて怒鳴る者。謝りながらそれから逃げる者。それを見て深夜にも関わらず笑い声をあげる見物人達。その喧騒は朝まで続き、枕の有無に関わらずその日眠りにつけた者はいなかっただろう。

「と言うわけで、これでほとんど全ての船が集まった」

誇らしげに言う宮間に対し、天井まで届くほどの山のような枕の天辺で、久賀野はさすがにやや苦笑いを浮かべていた。

「しかし宮間もよくやるよ」

僕がそう言うのと宮間は笑って言った。

「いや、これは俺がやりたかったただけだ。一度この寮内でこうやってバカ騒ぎしてみたくてね」

「そういうのは昼間にやれよ……」

「分かってないな。そういう“やっちゃいけないこと”が一番思い出に残るんだよ」

そう言った彼の表情は笑いながらも、少し寂しそうだった。そんなこと言われなくても分かっている。僕だって楽しかったのだ。後になって聞いた話だと、この迷信めいた儀式は宮間自身が考えたものだそう
だ。馬鹿馬鹿しいわけだった。

「さて久賀野。せっかく集めたんだし、他の奴らが騒いでもお前だけはちゃんと寝ておけよ」

「了解、おやすみ」

そう言つて久賀野は遙か天空で寝息をたて始める。言つてもみたものの、よくまあ寝れるもんだと僕と宮間は笑つた。

「おやすみ久賀野、良い夢を」

「良い旅を」

その3週間後宮間は寮を去つた。確かに彼が言つた通り、これは宮間の好きでやったことに他ならなかつたようだ。冬はより深みを増す。

枕騒ぎから更に2か月後。曇りとも晴れとも言えない曖昧な天気の下、実家へと帰る久賀野を僕は駅まで見送りに来ていた。

「別に大学通いながら、今まで通り適当にやってても良いと思うけどな」

結局久賀野はどこに所属することなく大学を辞めた。彼の夢は大学内にはなかったのだ。体調を崩しきる前に辞めるのは英断だと僕も判断したので、強く引き止めはしなかった。

「いや、どうせ大学で目的が見つかる気はしないし、これからは実家で働きながら適当にやるさ。それより自分の心配したほうがいいと思うよ」

「はっ、久賀野に言われるまでもないね」

そんな普段と変わらない軽口を言い合いながら彼は去って行つた。宮間も去り、久賀野も去り、駅には不明瞭な僕一人残されている。

宮間が寮から出ていくときに、彼と交わした会話を思い出す。

「宮間もついに研究室入りか。一番ふらふらしてそうだったくせにな」

「まあ、久賀野見てたらな……」

「ん？ あんな風にはなりたくないって意味で？」

宮間はその時も笑って言っていた。

「いや、逆だ。俺は羨ましくてもあんな風にはなれなくなって分かってな。俺が目指す現実是多分あいつの夢より魅力がないよ」

「本気で言ってるのか？」

「本気さ。だって良く言うだろ。『夢を諦めないで』って」

「……それは意味が違うだろ」

そういう僕には、どちらの意味での夢もないのだ。しかし同時に久賀野が苦しんでいるのも知っている。それでも僕は彼が羨ましかったと思えただろうか？

寮内に入る隙間風はそんな思考を妨げる。頭だけでなく、空洞のような僕の心をそれは直接冷やしているようだった。

久賀野を見送った日の夜。僕は夢を見た。

見渡す限りの真っ白な空間。

捉えようのない浮遊感。

それが夢だと僕はすぐに気付く。

そして何もない空間にただ一人女の子がいた。言い表せないような美しい容姿。そして、全てを包み込む

ような柔らかな笑顔。

そんな彼女に僕は叫んだ。

何故僕のほうに出て来るのか、と。

何故久賀野にまた会ってやらないのか、と。

気付いたら僕は泣いていた。

泣きながら叫んでいた。

それでも声は届かず、ただ白い空間に吸い込まれていく。それが分かってても叫ぶのは止めなかった。ひたすらに叫び続けた。

朝が来るまでに一言でも届けばいい。そう願いを込めながら。

もいちど夢で逢いましょう



もいちど夢で逢いましょう　あとがき

夢を大別するならば、それは「良い夢」と「悪い夢」でなく、

「寂しい夢」と「怖い夢」になると思います。

どちらも良いとは言えないけれど、朝に泣くほど寂しい夢は妙に癖になるときがありますよね。
そんなお話。

4992文字。「明るいお題を」と言いながら大して明るくもならなかったので、

タイトルだけは明るめに昭和の曲名的な気軽さで。

前回に引き続き、やや詰め込み過ぎな内容となりましたが、読んで楽しんでいただければ幸いです。